

京極読書新聞 <第112号>

発行日:令和4年 3月29日(火)
京極町生涯学習センター湧学館

「山吹」をめぐる(5)

〈『平家物語』を読む会〉 村山 功一

“御前”という呼称

京都三条の石碑には「山吹御前塚」と刻まれており、『平家』以外では、巴同様、山吹も“御前”と呼ばれていたことが分かります。“御前”については貴人に対する尊称という本来の意味のほかに、身分の低い女性(召使や使用人)を指す言葉、ということをも第109号で述べました。

それとは別の御前の意味を説いているのが中世文学者の水原一という方で、“御前”は警女(ごせ)であろう、という見解を発表し注目を浴びました。警女とは盲目の女性語り部で、一つの地域に定住して“語り部”として活動する人々と、全国各地を巡りながら活動する廻国(かいこく)警女がいたといえます。おそらく山吹や巴を名乗る警女、あるいは義仲合戦の顛末を語る警女が、全国各地で“義仲物語”を語ったのであろうと、水原氏は推測しています。

そう考えると、山吹(巴)の伝承が、広範囲に存在することも納得できます。義経を語る常葉警女、静警女の存在もまた頷けるところです。御前=警女、とても魅力的な説です。御前と書いて「ごせ」と読む読み方も特別なものではなく、女性を親しんで呼ぶ場合「わごせ」(そなた、あなた、おまえさん などの意)と言い、「吾(我)御前」と書きます。

御前を白拍子、身分の低い召使や使用人の女性の呼び名とする説が一般的ですが、白拍子や身分の低い使用人がすべて“御前”と呼ばれたのかというと、その辺は曖昧なのです。『平家』に登場する数名の白拍子、召使等が本文中でどう扱われているかを簡単に確認してみます。*1

身分	名	『平家』文中で御前が付く	『平家』以外で御前が付く
白拍子 (一種の芸人)	祇王	○	○
	祇女	×	×
	仏	○	○
	静	×	○
雑仕女 便女 (身分が低い)	常葉	×	○
	山吹	×	○
	巴	×	○

【注】

*1 本文は龍谷大学図書館蔵本を底本とする「日本古典文学体系『平家物語(上)(下)』/高木市之助・他・校注/岩波書店」を用いた。

祇王(ぎおう)、祇女(ぎによ)、仏は<巻一「祇王」>に登場し、静は<巻十二「土佐坊被斬」>に登場します。同じ白拍子ですが、『平家』本文では祇王と仏だけが御前と書かれ、祇女と静は御前が付きません。また、常葉は雑仕女ですが、本文では御前が付きません。それが『平家』以外では祇女を除く全てが“御前”とされています。

表にはありませんが高倉天皇に愛された葵は、高倉天皇に仕える女房に仕えていた人物で、雑仕女か端女(はしため)といった身分でしたが、御前とは呼ばれてはいません。同じく、捕虜となった平重衡のもとに派遣され、身の回りの世話をしつつ和歌管弦で重衡を慰めた千手(せんじゅ)という女性がいます。『平家』諸本の大部分は彼女を“女房”としていますが、“美女”とする本もあります。美女は「便女」で、山吹や巴と同じ身分です。彼女の母は白拍子(あるいは遊女)とされているので、それほど高い身分ではなさそうです。

御前の意を通説どおりに考えると、この葵と千手の二人は当然“御前”と呼ばれるはずですが、そうではなく『平家』では“葵の前”“千手の前”としています。「～の前」は女性の名につけて敬意を表す語です。『平家』以外でも御前と呼ばれた形跡はありません。白拍子や雑仕女、端女、便女が、すべて“〇〇御前”と称された訳ではないようです。すると、そこに何らかの規則的な基準や資格などがあったのかも知れません。

御前という呼称について考えてみましたが、通説にしても水原説にしても疑問は残ります。ただ山吹と巴に限っては、水原説の方がより説得力に富んでいるように思われます。

「山吹」という存在

そもそも山吹とは『平家』*2 においてどのような存在なのでしょう。何度も触れましたが、山吹はたった二回名前が書かれるだけで、全く姿を見せず物語から消えてしまいます。『平家』作者としては、無視してもいいような存在に思われます。物語世界ばかりではなく、たとえば木曾義仲を弔う「義仲寺」でも山吹は無視されていました。

「義仲寺」の由来はやや複雑で、諸説があります。最もポピュラーなのは、義仲が討死にした寿永三(1184)年、尼になった巴が義仲の菩提を弔うため同地に庵(いおり)を結んだのが始まりとする説。「無名庵」と名付けられた庵は、現在も「義仲寺」の境内にあるといえます。ただし、巴の实在が不明である以上、この説はやや怪しい。

また、近江源氏の佐々木義実(よしざね)が、同じ源氏である義仲の追悼のためにお堂を建てたのが始まりとする説。もっとも、現在見るような「義仲寺」の創建は、天文二十二(1553)年と伝えられているので、義仲没後、三六九年を経た戦国時代の創建ということになります。佐々木高頼(六角氏)*.3 の創建とする説などがありますが、いずれにせよ近江源氏(または宇多源氏とも)の佐々木一族が関わったようです。

それはさておき、木曾合戦から三百余年を経て整えられた「義仲寺」で山吹の墓(塚)が祀られたのは、さらに四二〇年後の昭和四十八(1973)年のことです。やはり山吹は無視されてもいいような取るに足らない存在だったのでしょうか。たしかに彼女は義仲にとって最も重要な合戦に間に合わず、主君のために死闘を繰り広げた巴とは大いに異なります。しかし作者としては無視しえない存在、名前だけでも書き残さなければならぬ存在として、彼女を捉えていたのではないかと思うのです。



▲ 伝・巴御前の墓
wikipedia「義仲寺」より

義仲の本拠地、長野県に義仲開基と伝えられる「徳恩寺」*4 があり、義仲が母の供養のために建立したといわれます。境内には母小枝の墓のほか、義仲と“木曾義仲一族”の墓群があり、その中に山吹・巴の墓も建っているのです。この地では巴とともに“一族”の一人に数えられる人物だったのです。

おそらく、義仲一族の中に山吹ありという伝承は、かなり早い時期から同地において語り継がれ、『平家』が成立したとされる1230年代には多くの人々の知るところとなっていたのではないかと思います。ほんの一時ではあったが征夷大將軍に任じられ、自ら“朝日將軍”を名のった英雄、木曾左馬頭(さまのかみ)源義仲の“一族”であれば、『平家』作者としては無視しえない、それなりの重みを備えた存在だったのではないのでしょうか。華々しい活躍はなくても、名前だけでも書き留めずにはおけない人物と捉えたのだらうと思います。山吹にまつわる伝説・伝承が各地に残るのも、彼女が単なる“便女”でなかったことを示唆しているように思われるのです。

『平家』は、いわゆる“源平合戦”により栄華を極めた平家が滅亡したという歴史的事実を描くとともに、“諸行無常・盛者必衰”という仏教的世界観を描いています。こうした中心となる史実や思想のほかに、様々な伝承や説話、人物にまつわるエピソードを採り入れて彩り豊かな物語世界を構築しています。山吹も“義仲物語”の中に一族に連なる人物として採り入れられて、その名を留めたのでしょう。

おわりに

山吹という姿の見えぬ人物を追い求め、“旅”を続けてきました。そして彼女が義仲一族の一人であるという伝承に辿りつきました。しかし、この旅は現地に足を運んだのではなく、様々な参考書などを読み、そこに「もし」と私見を積み重ねた“活字の上”の旅に過ぎません。いつか「義仲寺」や「徳音寺」そして山吹、巴が育ったという木曾谷を訪ねてみたいと思っています。そして何よりも、このレポートを読んでくれた皆さんの中から、将来『平家』の研究者となって、この謎に満ちた山吹の“実在”を発見する人が出てくれることを期待しつつ、長かった“旅”を終わります。

◀『平家物語の舞台』(邦光史郎、百瀬明治/徳間文庫/1988初版本)より



【注】

- *2 『平家』には二つの系統がある。一つは琵琶法師の語りの台本とも言える“語り本系”諸本で、一般に『平家』といえばこの中で最も完成した本文を持つ「覚一本」を指す。一方、読むことを前提とし、物語性の強く巻数も多い諸本が“読み本系”である。山吹の名を記すのは語り本系。
- *3 大角氏も、私たちの町に縁の深い京極氏も、その先祖は近江源氏佐々木氏である。六角氏の初代泰綱と京極氏初代の氏信は兄弟だが、戦国期に両家は敵対する。
- *4 義仲がこの寺を建立したのは仁安三(1168)年で、その当時は「柏原寺」という寺名だったという。「徳音寺」と名を改めたのは正徳四(1714)年と伝えられる。

続「山吹」をめぐる

〈『平家物語』を読む会〉 村山 功一

はじめに

木曾義仲の菩提寺「徳音寺」の一族の墓群の中に山吹の墓もあることを知って以来、ずっと気になっていたことがあります。それは、便女という低い身分の山吹が何故一族の中に名を連ねているのか、ということです。滋賀県大津市の「義仲寺」は有名ですが、創建以来長くこの寺に山吹の墓は無かったのです。「義仲寺」では“一族”どころか境内にも入れられなかった山吹が、本家本元ともいえる徳音寺では一族として扱われているのは不可解です。徳音寺における“破格”の扱いは、この時代にあっては何か特別な事情がなければありえないことです。その事情とは何か。一つの伝承を頼りに考えてみようと思います。

“一族とは“

一般に一族*5 とは当主を頂点に、子・伯叔父・兄弟・従兄弟といった男系血縁集団を指します。二歳で孤児となり、乳母の夫である信濃木曾谷の豪族・中原兼遠に傳育(ふいく)*6 された義仲にとって、一族と呼べる人々はほとんどいません。確認できる唯一の肉親として嫡男の義高がおりましたが、鎌倉の頼朝との対立が激化した時、義高を人質(形の上では頼朝の娘、大姫の婚約者)として差し出し衝突を回避しました。したがって、義仲の周辺に一族としての肉親は皆無となってしまいました。

なお、武家の一族は血族のほかに擬制的親族関係*7、乳父(めのと)*8、乳母子(めのとご)を含むのが通例でした。義仲の場合は中原兼遠とその子、樋口兼光・今井兼平がそうです。『平家』など多くの軍記物語には主人と乳母子の絆は、実の兄弟よりも強いものとして描かれています。

山吹の出自

徳音寺の墓所には、もちろん巴の墓もあります。巴は中原兼遠の娘と(一説に樋口兼光の娘とも)伝えられており、一族の墓群の中に巴の墓があっても問題はないでしょう。しかし、山吹については義仲との血縁はもちろん、中原一族との接点も全く見られません。山吹の出自については『平家』に関する研究書・解説書・事典類にも“伝未詳”とするか、項目さえないものが多数を占めているのですが(第109号参照)、そんな中でわずかに <上野国(こうずけのくに)の住人・多胡太郎家国の娘か> とするものがあります。この伝承が山吹が義仲一族に加えられる何らかのヒントを与えてくれるのではないかと大いに興味を抱きました。

【注】

- *5 一族と似た言葉に「一門」があるが、一門は中世期に公家(貴族)や上級の武家に用いられた。藤原一門、平家一門など。時代とともに、一族、一門、一家はほぼ同義となった。
- *6 幼い主君を守り育てること。
- *7 血縁者ではないが、儀礼などを経て実際の親子・兄弟同様あるいはそれ以上の強い結びつきをもった人々。
- *8 主として乳母の夫。幼主を守り育てる男性。

多胡氏と義仲

群馬県高崎市に、日本三古碑の一つ「多胡碑」(たごひ)があります。この石碑は和銅四(711)年上野国の地域を整理統合し、多胡郡としたことを記念して建てられたと伝えられています。^{*9}以来、郡司を務めたこの地の豪族が多胡氏を名乗り、多胡太郎家国は古代から続く多胡氏の末裔です。では、この多胡一族と義仲の接点はどうか。

以仁王の令旨^{*10}を受けた義仲は、平家打倒のため上野国多胡に入ります。実はこの地は義仲にとって重要な意味を持っていました。

<～また『東鑑』(『吾妻鑑』)にも、「源義仲、信濃を出でて、上野に入る。

これ多胡荘は、亡父義賢の遺跡たり」とある>^{*11}

義仲の父、帯刀先生(たてはきのせんじゃう)^{*12} 源義賢は領主として多胡荘を治めていたことがあり、多胡先生と呼ばれていたといえます。多胡氏は義仲の父に仕えていたのです。

こうした縁の深い亡父の遺領に、立派に成長した義仲が平家追討の大義を掲げてやって来たのだから、多胡氏の感激はひとしおだったことは想像に難くありません。この様子は『平家』巻六「廻文」に

<上野国に、故帯刀先生義賢がよしみにて、田子の郡の兵ども皆したがひ

つきにけり(上野国では、故帯刀先生義賢のゆかりで、多胡郡の武士どもが皆したがいついた)>

とあることから察せられます。一族の少ない義仲にとって多胡氏は、最も頼りになる味方だったに違いありません。また、亡父との関係から側近中の側近、あるいは一族に準ずる処遇をしたのではないのでしょうか。

『平家』の諸本に多胡太郎家国の名は見えません。しかし、『源平盛衰記』、諸本の「延慶本」、流布本の「文祿本」に、多胡次郎家包の名が見えます。名前から考えて太郎家国の弟かと思われます。

<～粟津辺二成ニケレバ、主従五騎ニゾ成ニケル。手塚別当、同 甥手塚太郎、
今井四郎兼平、多胡次郎家包也>

義仲が追い詰められ最期を迎える場面を、「延慶本」はこのように描いており、最後まで主人義仲を守り、支える者としての多胡次郎の姿があります。これに続く場面では、義仲の周辺には乳母子の今井兼平と多胡次郎の二騎だけになってしまいましたが、それでもなお奮戦する姿を描きます。ここに、乳母子に劣らぬ多胡次郎の義仲への忠節と、強い結びつきが見受けられます。

こうして見てくると、義賢の旧恩に報いるとともに、その子義仲に全力で尽くす多胡一族を、義仲は自らの一族とみなしたとしても不思議ではないように思います。いずれにせよ多胡一族は、義仲軍団の中で高い地位にあったことは間違いのないでしょう。

伝承としての山吹

多胡太郎家国に娘があったか、そしてその娘が山吹だったかは、不明です。ただ、義仲と多胡氏の関係を考えて山吹が一族とみなされる可能性は十分あるように思います。山吹が多胡太郎の娘だったとしたら、そして多胡氏が義仲の“一族”とみなされる地位だとすれば、身分は便女でも彼女の墓が一族とともにあるの事は自然ではないかと思われれます。

多胡氏が一族を挙げて義仲に従いついたとき、女性も伴っておりその中の一人の娘が便女として、女武者として、義仲の側近くに仕えた、ということは十分にあり得るとは考えられないでしょうか。そこに、その娘が山吹であるという伝承が成立したのだと思います。後年義仲の遺臣らが德音寺に一族の墓を建立したとき、これらの伝承を信じた人々によって山吹も仲間入りしたのではないのでしょうか。

おわりに

中原兼遠その子、樋口兼光・今井兼平兄弟、多胡太郎家国・同次郎家包はともに実在の人物です。しかし二人の女性、巴、山吹は実在が確認されない伝承の人物です。ただ、伝承人物を架空の人物と捉えるか、伝承のなかに実在の可能性を見出すかは、受け取り方の問題かと思えます。私は後者を採りたい気持ちではありますが……。

ただ、残念なことに『平家物語大辞典』に掲げられている山吹の足跡、史跡の中に群馬県吉井町(多胡)の名はありません。しかし、「(山吹は)多胡太郎家国の娘か」とする伝承と、義仲と多胡氏の緊密な関係に注目すると“特別な事情”も納得できます。

山吹の出自は伝承ですが、義仲と多胡氏の結びつきは、ほぼ史実です。伝承と史実を混ぜ合わせて「歴史」を語ることは、もちろん誤りです。しかし『平家』という文学作品を読解、鑑賞して楽しむ場合にはこうした推理、推論も許されると思えます。この様に観てくると、義仲が母の供養のために建立したという由緒ある德音寺に、一族とともに山吹の墓が建つ不可解さが、少しだけ薄らいだように思われるのです。

【注】

*9 「胡」は広く異民族、渡来人のことで、「多胡」は文字通り“渡来人が多く住んでいる地”の意。古代の多胡郡には、主として朝鮮半島系、中国系の渡来人が居住していた。(『多胡碑が語る古代日本と渡来人』土生田純之・高崎市編/吉川弘文館/湧学館蔵213. 3タゴ)による。

*10 以仁王もちひとおうは後白河院りょうじの第二子。「令旨」は皇族の命令を伝える公文書。

上皇・法皇の命令書は「院宣いんぜん」、天皇の命令書を「宣旨せんじ」という。

治承四(1184)年、以仁王は平家打倒の令旨を発し、源頼政とともに挙兵。乱はたちまち平清盛により鎮圧され、王は逃亡途中流れ矢に当たり絶命し、頼政は宇治平等院で自害した。しかし、令旨は各地の源氏に届けられ、“源平合戦”の発端となった。

*11 (『姓氏家系歴史伝説大事典』志村有弘編/勉誠出版/湧学館蔵R288. 1セイ)による。

*12 東宮(皇太子)坊の長官。東宮坊は皇太子を警護する部署。

帯刀は(たちはき)とも読む。

村山功一さんと平家物語読書会

平家物語読書会は、平成21年(2009年)5月から平成31年(2019年)3月までの約10年間・月2回のペースで開催されていた読書会です。開催中の平成24年(2012年)にはNHK大河ドラマ「平清盛」の放送もありました。現在放送中の「鎌倉殿の13人」も同じ時代の物語です。京極読書新聞では年度末に一年間の活動を振り返る記事を掲載しており、平成25年度(第43号)には今号でも登場している義仲寺にある山吹の墓についても触れられています。

講師を務められていた村山さんは、高校教諭を退職後京極町に移住され、湧学館の様々な活動にご協力くださり、図書ボランティアや読書感想文コンクールの審査員としてもご活躍されています。

令和4年度は<『平家物語』を読む会・Part2>として再び読書会がスタートする予定です。テーマは『平家物語』の周辺—『建礼門院右京大夫集』と『平家公達草子』の世界—。開催についての詳細は、広報きょうごくや回覧でお知らせします。以前の読書会に参加されていた方はもちろん、新たに興味を持たれた方も大歓迎です。一緒に古典文学の世界を楽しんでみませんか？



▲ 祝『平家物語』全巻 完全読破達成(2019年(平成31年)3月15日)

「山吹」をめぐって 掲載一覧

- 第108号… (1) 木曾義仲と二人の美女
 - 第109号… (2) 「トモエ」と「ヤマブキ」ほか
 - 第110号… (3) 伝説・伝承に見る「山吹」の足跡
 - 第111号… (4) 各地に残る伝説・伝承が意味するもの
 - 第112号… (5) “御前”という呼称 ほか
- (続) 一族とは ほか

読書会のまとめや、その他の『平家』関連記事を掲載した京極読書新聞のバックナンバーは湧学館ホームページに掲載していますので、どうぞご覧ください。

(<http://lib-kyogoku.jp>)

図書館の『記念日』って？

絵本週間	3月27日～4月9日
国際子ども本の日	4月2日
子ども読書の日 世界図書・著作権の日	4月23日
こどもの読書週間	4月23日～5月12日
図書館記念日	4月30日
図書館振興の月	5月1日～31日
納本制度の日	5月25日
学校図書館の日	6月11日
国際学校図書館月間	10月
文字・活字文化の日	10月27日
読書週間	10月27日～11月9日
文化の日	11月3日

図書館の記念日をご存じですか？本に関する記念日として有名なものは、やはり秋の読書週間でしょうか。実は「図書館記念日」は、秋ではなく春の4月30日です。

図書館記念日は、1971年に図書館法公布の日(1950年4月30日)を記念して制定されました。表に本・読書に関する主な記念日をまとめましたが、4月から5月は「子ども読書の日」から始まる「こどもの読書週間」、「図書館記念日」翌日からの「図書館振興の月」など、読書や図書館を勧める重点期間のようですね。ちなみに納本制度の日は、2008年に国立国会図書館の納本制度60周年を記念して制定されたもので、意外と新しい記念日です。

秋の夜長に楽しむ読書も素敵ですが、新生活が始まったり、新しいことを始めたくなる春も、読書にはおすすめの季節ですよ。

*「記念日」は、広義で週間や月間も含まます

【参考】

<https://www.kodomo.go.jp/info/anniversary/index.html>

国際子ども図書館「子どもと本に関する記念日」(2022.3.17)

https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000080114

レファレンス協同データベース「図書館に関する記念日について知りたい」(2022.3.17)

「すぐに役立つ366日記念日事典(上巻・下巻)」日本記念日協会/編 創元社

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.jp>



京極読書新聞のバックナンバーは、湧学館での配布・湧学館ホームページからご覧ください